
猿の世界にとりっぷ！

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猿の世界にとりつぷ！

【Nコード】

N93360

【作者名】

国高ユウチ

【あらすじ】

皆様が書かれる『動物の世界にとりつぷ！』の作品をリスペクトした挙句萌え滾って勢い書いてしまいました。やっちゃった感ばかりですが、楽しかったです。全く好みじゃない彼に追いかける女の子と、構いたくて仕方ない男の追いかけてです。

猿の世界にとりっぷ！（前）

拝啓 お母様。

私が世界の誰よりも尊敬する美しく賢くて強いお母様。

お元気に過ごしていらっしゃるでしょうか。

風邪など召されずに健やかに過ごしてでしょうか。

何でもお一人でなされようとするお母様が、私は心配でなりません。呑んだくれで仕事もせずいつも家で寝ている拳句に浮気しまくりな親父が愛人と蒸発してから、細腕一つで私を育ててくださったお母様。

いつだって心の一番大事な部分にはお母様がいてくださいます。

大好きな大好きなお母様。それなのに今の私は大好きなお母様の手助けをして差し上げることが出来ません。

突然目の前から居なくなった親不孝な娘にお母様はどれほど心を痛められるでしょうか。

想像するだけで胸が張り裂けてしまいそうです。

ですがどうか心配なさらないで下さい。

貴女が育ててくださった娘は、何処の地でも強く生きていきます。

どうかどうか笑って過ごしてください。

『大丈夫。人生なるようになるよ』

その一言を胸に、私は生きてまいります。

遠い異世界の空の下から、私は貴女を思い続けます。

どうか、親不孝な娘など早く忘れて幸せになってください。

貴女が最大の誇りだと言って下さった娘、愛理^{あいり}より

「・・・お？お嬢ちゃんじゃねえか。こんなところで何してんだ？」

折角の仕事休みに最愛の人への手紙を書いていた私は、どこか気だるさを含むバリトンの声に顔を引きつらせる。

ちなみにこんなところとは広大な屋敷の中にある台所のさらに片隅にある隙間の中だ。

手紙を書いているなんて誰にも見られなくて、小さな体を生かして入り込んだのに、よりもよってこの人に見つかるとは。

悔しさに唇をかみ締めながら、ゆるりと顔を後ろに向ける。

そこには少し焼けた肌に濃い金色の髪と同色の瞳を持つ、がっちりとした体格の精悍な顔つきの男が立っていた。

少し太めの眉は訝しげに上げられ瞳は無駄に好奇心がちらついている。

無精ひげが残る顎に手を当てると、優に2メートルは超える体を折り曲げ私を覗き込んだ。

この男の名前はガイホウ様。一応私の上司に当たる人だ。

男臭さ爆裂の美丈夫だが、ありがたくも私の好みから外れている。

自分より60cm近く小さい私にまで手を出そうとする、色を好むセクハラ野郎だ。

しかしながら一応（ここ強調）私のご主人様でもある。

この世界は私が住んでいる世界とは全く違う。

詳しいことは右から左へ聞き流してしまったのであれだが、どうやら空から人間が異世界トリップで降ってくることもある世界らしい。基本的に住んでいるのは獣人と呼ばれる獣の姿と人型の姿を有する彼らで、空から降ってくる人間族は落人おちゅうじんと呼ばれるらしい。

ありがたい事に落人はこの世界で保護されるらしく、何らかの仕事を与えるまでは上位種に保護してもらえる。

ちなみに私が落ちたのはガイホウ様が治められる猿たちが住む森の中にある集落だった。

あの日、尊敬し敬愛するお母様と一緒に遊びに行った動物園。

何と生まれたばかりの子猿に触れるというイベントがあり、お母様が行きたいと言うので私も付いていった。

きゅるんとした瞳にテシテシ動く長い尻尾。

お乳を上げられるとこのことで奇声を上げて喜ぶお母様に手近の子猿を持たせ、私はと視線をめぐらせたとき、私は一匹の子猿を見つけた。

私を誘うように尻尾を振りながら子猿は木が生えている方へ歩いき、飼育係の人はお母様に付きつきりで気付いていないしで慌てて彼だか彼女だかを追いかけている途中　　私は何らかの穴に落ちた。

そこから先は長い長い。

ある程度まではずつと罵詈雑言、怨み辛みを延々と吐き出し続けていた私だが、段々と飽きてきた上に何だか酔いそうになったので目を瞑った。

船の上で酔う人間は耳から得る情報と視覚的な情報が脳で一致しないために起こる現象だという。

なら目を瞑れば少しはマシになるんじゃないかと思った私は、半分人生を投げていた。

何故ならどう考えてもあんな長距離を落下すれば、落ちた瞬間即死だろうと想像はつく。

東京タワーから落ちてももつと早く地上に着くわ！と突っ込みを入れたいくらいの長時間を私は延々と落ち続けていた。

奇跡でも起こらない限り、どう考えても無理でしょう。

ならせめて、周りを見たくないと思っただのは、恐怖を堪えるためだったに違いない。

しかし神様は奇跡を起こしてくださった。

瞼の裏が明るくなった瞬間、風の音が変わる。

これはついに覚悟する時が来たな、と体に力を込めて衝撃に備えようと、想いも寄らない事態が起こった。

「っ！！？」

これは確実に腕が抜けたな、と確信に至る強い衝撃と共に、右腕が嫌な感じに傾く。

あまりの痛みに声も上げれず、舌を咬まない様に必死に歯を食いしばった。

ぶわっと冷や汗が滲み出て一気に体温が下がる。

涙を滲ませながら、それでも漸く開いた視線の先には、超巨大なモンキーがいた。

日本語で言うと超巨大猿。

ひくりと喉の奥が引きつった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

太陽を浴びて反射する美しい毛並みとか、深い色をした瞳とか、堂々とした立ち振る舞いとか、そんなの全く関係ない。

痛みに絶叫するどころか、驚きすぎて一瞬涙も吹っ飛んだ。

ゴリラ並にでかい猿に腕を引っ張られ、私はどうしようもなく途方にくれる。

とりあえず悲鳴を上げたくとも痛みに声が出せないし、泣き喚きたいのにしぶとい理性がそれを赦さない。

仕方なしに妥協案として普段は滅多に動かさない表情筋をフル稼働させると、へらり、と小さく笑ってみせる。

驚いたように目を見開いた超巨大猿の姿を最後に、私の意識はブラックアウトした。

後に私の上司になるガイホウ様は、意識を失ったままの私をそのまま保護して屋敷に連れ帰ってくださった。

そして手厚く看護していただき、勿論心から感謝している。

だが、私はこう思わずにいられない。

何故、別の種族のところに落ちていかなかったのか、と。

一度拝見した虎族の長様はそれはもう格好いい。格好いい上に優しく紳士で、そこに住む同胞のりんちゃんもすこぶる可愛い。

育てられているちいさきものは愛らしく、私も混ぜていただきたい。そこが駄目なら凜とした狼族のお方の所でも、野性的な豹族のお方のところでも、優しい羊族のお方のところでも、ジェントルメンな犬族のお方のところでも、お会いしたことがない他の種族のどの

お方のところでもいい。

とにかく、この猿族と書いて好色族と読むセクハラ野郎、否、ガイホウ様の傍から離れた場所で暮らしたい。

当たり前だが私はガイホウ様に感謝している。

助けていただいたご恩は忘れないし、一生をかけて返したいと願っている。

当たり前前に差し伸べられた手に涙を流したこともある。

しかし、だ。

私は好色野郎のハーレムの一員になる気はこれっぽっちもないし、私の理想から正反対の生き物に手籠めにされる気はない。

ガイホウ様はいいところも沢山お持ちだが、私にとっては最早マイナス面の蓄積が多くなりすぎた。

まず第一に、彼は怠惰だ。

猿の種族は森に集められた各国の図書を大木の中に作った図書館で管理する役割を持つ。

つまり司書さんのようなものだが、集められた情報を選び分けたり欲しがる相手に郵送したりと仕事はあるくせにガイホウ様は仕事をしない。

働かない男が嫌いな私からすると、お前は日曜日の親父かと言いたくなる位にのんびんだらりとソファの上、もしくはベッドの上でのつたりのつたり過ごす。

そして第二に、彼は酒を好む。

アルコールには目がなく、飲み始めれば一本では終わらない。それどころかいい感じに酔っ払うと一樽だろうと消費する。顔を赤らめ酒臭い息を吐きながら絡む姿は最悪だ。

さらに第三に、彼は色を好む。

そういう種族なのかもしれないが、基本的に彼に仕えるメイドはほとんどがお手つきだ。例外は私くらいで、その私にすら彼は言い寄る。働き者で美人のメイドさんたちは割り切っているらしいが、私は割り切れない。

彼はとてもいい人だが、被ってしまうのだ、私の父に。

私の最愛のお母様を苦勞させ、そして勝手に私達を捨てて蒸発した父に。

あんな屑とガイホウ様と一緒にするのは甚だ申し訳ないが、それでもふとした瞬間に考えてしまうのは、お母様の言葉が原因かもしれない。

『いい、愛理。どれだけ魅力的でも強くても格好よくても止めなさい。顔がいいからって女侍らせて当然と思う男もアウトよ。普段からこつこつ働く男がいいわ。紐は駄目よ、紐は。どうせなら利益のために尽くしてくれるホストのような男にしなさい。ホストくらいに己の技術を高めてお金と引き換えに心地よくしてくれる一流の男なら考えてもいいわ。あなたは私に似て顔はいいから変な輩には十分気をつけるのよ』

子供の頃から動物園に連れて行ってもらったたびに聞かされた言葉。

猿を見るお母様の瞳は愛しげで、そのくせ悲しみに満ちていた。子供心に誓ったのだ。お母様の言いつけを守ろうと。

おかげさまで私は文武両道に育った。

小さく華奢な体つきに、掌から僅かにはみ出るサイズの胸。白い肌と癖の入った茶色の髪。顔は小さく反して瞳は大きい。

よくお人形さんみたいだと称された私は異性の目に止まりやすい。しかし利用される気は欠片もなく、弄ばれるなど真っ平御免だ。

自分とお母様を護るために近所の道場で頼み込み、無料で教えを請うた日が懐かしい。

とにかく、私からすれば好みじゃない男もいいところのガイホウ様は、何が楽しいのか何かと私に構ってくる。

今だつてにやにやと笑みを浮かべて、警戒心も露にした私の首根っこを捕まえるとひょいと持ち上げるとぐっと顔を近づけてきた。

絶対的な体力差故になされる行為は苛立つが、抵抗すれば喜ぶだけと学んだのでぐっと我慢する。

長だけあつてガイホウ様は強い。手合わせを申し込んだらそれこそ赤子の手を捻るようにやられた。

悔しさを胸に抱き、両腕にお母様へと書きとめた手紙を抱きしめ睨めば、喉を鳴らしそうな顔で目を細めた。

「何だ？随分と反抗的な目をするじゃねえか、お嬢ちゃん。機嫌でも悪いのか？」

「・・・この体勢で機嫌がいい人間が何処にいるのですか」

「駄目か？俺の弟や妹はこうして首根っこ捕まえて移動するんだがなあ」

「私は貴方の弟でも妹でもありません。手を離してください。それに今日は私はお休みを頂いてます。ヨウゲン様と一緒に出かけす

るんです」

ツンと顎を逸らして訴えた私の言葉に、ふうん？と愉しげな声を出したガイホウ様の表情は決して笑っていない。

ヨウゲン様とはガイホウ様の弟で、私が面倒を任されている転化前の子供だ。

お母様の教育で炊事洗濯家事掃除、ついでに併せて勉学運動と全てをきっちりと修めてきた私は、現在ヨウゲン様御付きのメイドになっている。

去年まではメイド見習いだったのだが、一年で仕事を全て覚え、ついでに空いた時間に勉強などもしっかりして知識を蓄えたところ、メイド頭に移動を命じられたのだ。

それまで数多くのセクハラをガイホウ様から受けていた私のその瞬間の喜びつたらない。

一年間地道に努力を続けたのも彼の御付きから逃れるためで、涙涙で毎日訴えた甲斐があったものだ。

ヨウゲン様はまだ子供でいらっしやるので、この兄上のような色欲魔人にはなられていない。

それなら私の教育次第では彼は一夫一婦制を踏襲できるのではないか、というのが最近の私の目標だ。

ヨウゲン様を腕に抱きながら睨み付けていると、人差し指一本で私の顎を持ち上げたガイホウ様は、にいと随分と漢くさい顔で笑った。性質の悪い笑みに、背筋を怖気が走る。

肉食動物に狙われた獲物は、きつとこんな気持ちになるに違いない。

僅かに身を震わせれば、発達しすぎた犬歯を剥き出しにしてガイホ

ウ様は顔を近づけた。

唇が触れるのではないか、と思えるほどすれすれまで近づくと、うつそりと口を開く。

「なあ、お嬢ちゃん」

「・・・何ですか」

「どれだけ抵抗したって無駄だ。俺はお嬢ちゃんを気に入ってるんだ。手放す気はないぜ？」

「関係ありませんね。それに私は好きな殿方がおります故、ガイホウ様はお呼びじゃありません」

「好き、ねえ。俺以上に魅力的な男がここに居たっけか？」

「ええ、居ますね。私にとってはあなた以上に魅力的な方。お静かで女関係も派手じゃなくお優しく穏やかで働き者のタイガ様が」

胸を張って告げれば、ガイホウ様の瞳がまん丸になった。

手の力が緩んだのを気に、一気に体を伸ばして手から逃れる。

啞然としたままのガイホウ様にスカートの端を持って礼をすると、私はさっさとその場を後にした。

猿の世界にとりっぷ！（中）

高揚する気分のまま、木で出来た道をさくさく歩く。

猿の集落は木の上にある。2 mはある枝が道代わりで、離れている枝には木で出来たつり橋が架かっている。

猿の一族は基本的に地上を歩かない。それは古よりの慣わしらしいが、地球と同じなら敵対種族から逃れるためだろう。

地上十数mの位置にあるこの道は当たり前前に舗装はされてなく、バランスを崩したらまっさかさまで人間の私は一巻の終わりだ。

つくづく高所恐怖症でなくてよかったと思う。

「アイリー、どこいくのじゃ？」

「タイガさんのところですよ。ヨウゲン様用に面白い絵本を見つけてくださったんですよ」

「おいらよう？」

「はい。きつと面白いですよ」

腕に巻きつく小猿さんの頭を撫でながら告げる。

きゅるんとした大きな瞳は愛くるしく、小首を傾げた仕草は微笑まらずにいられない。

その姿は昔は流行った抱っこちゃん人形に似ている。

二の腕から手首まで伸びる尻尾の先がふりふりと動き、片手で握れる小さな頭を思わずなで繰り回した。

きいきいと嬉しげに声を漏らしたヨウゲン様は、あのガイホウ様の弟とは思えないくらい愛くるしい。

自分より大きい猿は苦手だが、子猿さんは大好きだ。

特にお世話を仰せつかっているヨウゲン様に関しては、休みの日ですら連れ回すほど可愛がっている。

何しろヨウゲン様は甘えたい盛りで常に傍に居たがるのだ。私を母親代わりに思っているのだろう。

向こうの世界で見た小猿は大抵母親にべったりだった。母親がいないヨウゲン様は、私にその分甘えているのだ。

腕にしがみ付いていたヨウゲン様が、するりと肩までのぼり頬を摺り寄せた。

ぬいぐるみのように柔らかな手触りはずっと触れていたいほど。

ヨウゲン様の毛並みの手入れも私の仕事の一つで抜かりはない。伊達に毎日特性のブラシで梳っているわけじゃないのだ。

「おいえほんはすきだ！おもしろいしべんきょうになる！」

「まあ！さすが私のヨウゲン様！お勉強を嫌がらないなんて素敵です」

「ほんと？じゃあ、おいらががんばったらアイリはおいらのおよめさんになってくれる？」

「ふふふふ。ヨウゲン様が勤勉で優しく一途に成長されたら考えますね」

「ん、おいらがんばる！」

肩の上できーきーと喜ぶ小猿は可愛い。

そう言えば昔シンバルを持ってかつしゃんかつしゃんやる猿の玩具をお母様にもらって大切にしていたが、あれは何処にやったのだろう。

考えている内に目的地にたどり着き、木に嵌められたドアをノックする。

「はいはい？」

「タイガさん、愛理です」

「アイリさんですか」。ドアは開いてますよ」

「はい。失礼します」

ドアを開ければ木を刳り抜いた部屋の真ん中に、にこにこした笑顔のタイガさんが居た。

こげ茶色の髪をゆるく三つ綱にしたタイガさんは、穏やかな眼差しでこちらを見ていた。

ガイホウ様のように体格もよくないし見栄えもしない方だが、そのこげ茶の瞳に宿る穏やかさこそ私は好んだ。

ハーレムを持つても何の違和感もない猿の一族にありながら、彼は一夫一婦を主とするテナガザルだ。

そこら辺の価値観も含めて私はタイガさんの傍に居るのが好きだった。

何しろ他の猿の男どもは顔を見ると挨拶代わりに口説くような阿呆ばかりだ。

あの天使のような子猿ちゃんたちのなれ果てがあれだと思つと絶望する。

袖にしても袖にしても全く懲りない姿は本当に腹が立つ。

何が腹が立つって、隣に恋人と思しき女性を連れながらもこちらを口説く態度が許せない。

一度ガイホウ様に訴えたら、『口説かれるのはいい女の証だろ？何がそんなに腹が立つんだ、お嬢ちゃん？』と心底不思議そうに言われた。

猿の一族にとって強く魅力的な男のハーレムに入るのは、ごく一部の例外を除き一般的には名誉なことらしい。

私からしたら『ふざけるな!』の一言だ。

魅力的な男に侍るのが女の幸せって何様だ。

複数の女が一人の男に仕えて当然なんて考え方は、私には受け入れられない。

別の女を口説かれて平気な恋人が何処にいる。

しかしながらそれは私の常識で、猿の皆さんは色々と納得済みらしい。

重婚も罪にならないので私の方では異端だ。

異端だと理解しても納得は出来ないので、余計にタイガさんの居る場所へ通うのかもしれない。

「お招きいただいてありがとうございます。これ、つまらないものですけどどうぞ」

「おやあ？また差し入れですか？」

「はい。マフィンです。ナッツをいただいたので、それを使いまして。お口に合うといいんですけど」

「それすごい良かったぞ！あにじゃもムハムハじゃった！」

「へえ、ガイホウ君も。お気に入りなら僕がもらってもいいんですか？」

「勿論です！元々私、タイガさんのために作ったんですから」

「おやおや、それは嬉しいですねえ。こんなに若くて可愛い人手作り品を差し入れてもらうの、僕初めてです」

ほにゃっと笑ったタイガさんは可愛い。

本性のテナガザルの姿も可愛かったが、彼の気質そのものがとても可愛い。

タイガさんは人で言う大体35歳くらいらしい。

確かに少しばかり年は離れているが、恋にそんな関係ない。

優しくて勤勉で穏やかで頑張り屋。タイガさんは私の理想だ。

さらに猿の一族でありながら私と極めて近い価値観を持つていて下さる。

笑顔にめろんとなっていると、不意に後ろから体が引かれた。目をまん丸に見開いているといきなり視界が高くなる。

「おやあ、ガイホウ君じゃないですか。遊びにいらしたんですか？」

「・・・俺がこんなとこに遊びに来るわけないだろうが。遊びならもつと面白げのある場所に行く」

「ならさつさと消え失せて下さい。手早く失せて下さい。色々な意味でお呼びじゃありません」

「つれねえなあ、お嬢ちゃんは。俺が女を追いかけるなんて滅多にねえんだぜ？」

「左様ですか。もし一億万が一私がガイホウ様に憧れていたなら喜ぶでしょうけど、押し付けがましいだけです」

「・・・本気でつれねえ」

「あははっ、ガイホウ君がそこまで袖にされてるのを見るのは初めです」

「・・・タイガさんでしたら歓迎です。優しくしてくださいませ」

「え！？」

ガイホウ様の腕に腰掛けた状態で手を広げれば、金魚のように口を

パクパクとさせたタイガ様は顔を真っ赤にして目を見開く。
私より随分年上のはずなのにそんな仕草はとても可愛い。
きゅん、と胸の奥が高鳴り思わず微笑が零れる。

腰を持っていた手を移動させると、ガイホウ様は私を腕に座らせた。
がつしりとした腕は私一人支えても全く揺るがないが、セクハラに
腹が立ち爪を立てる。

『痛い』と眉を寄せながらも、聞こえよがしにため息を吐き出した。

「お嬢ちゃん趣味が悪いな。タイガの何処がいいんだ」

「優しくて穏やかで働き者で女侍らさないで可愛いところです」

「三十路越えた男が可愛い？ 気色悪いの間違いだろ。そいつがその
年まで独り身なのは魅力ねえから女が寄って来ないのが原因だ。大
体、力がある男が女を囲うのは猿の中では普通だぜ？」

「ですがタイガさんは違います。ねえ、タイガさん？ 女は一人で十
分ですよ」

「・・・その、僕はそもそもガイホウ君みたいにもてませんし、
それ以前ですけど。でも好いた相手は一人で十分ですね」

「ほら見てください。いいですか、ヨウゲン様。真に女を惚れさせ
なければ、タイガさんみたいに一途な男でなければ駄目ですよ」

「いちずならアイリがよめにくるのか？」

「ええ、そうです。私は大勢の中の一人より私だけを見てくださる
方がいいですよ」

「そうかー！ ならおいらあにじゃみたいにならない」

「・・・人の弟にどんな教育施してんだよ、お嬢ちゃん。他所じゃ
どうか知らねえがな、猿の中じゃハーレムは異端でも何でもねえ。
むしろ強い男の証みたいなものだ」

「それでも例外はいらっしゃいます。ね、タイガさん」

「え？ まあ、確かに僕みたいなお男子もおりますけれども。長のガイ

ホウ君と比べるのも……。そもそも僕みたいな弱小者と違い、ガイホウ君は育ちが違いますから」

「タイガ」

静かな怒気を孕んだ声にタイガさんがびくりと身を竦ませる。

私の腕に巻きついていたヨウゲン様も身を縮めるようにして力を籠め、硬く目を瞑った。

腕に抱いていた私を降ろすと、無言でタイガさんに近寄る。そして胸倉を掴み上げると顔を近づけた。

そうするとタイガさんとガイホウ様の身長差は20cm以上あるので、タイガさんは爪先立ちになる。

怒りのあまりかガイホウ様のお尻から尻尾が現れ、ばしんばしんと床を打った。

「ヨウゲンの前で余計な口を利くな。これの傷はまだ癒えていねえんだ。俺だけの問題なら許すが、分を弁えろ。昔なじみであろうと容赦はしない」

「……すみませんでした」

「気分が悪い。屋敷に帰る」

唐突な怒りに唖然としている私の前を横切り、ガイホウ様はそのまま出て行った。

一体何が彼の逆鱗に触ったのか判らないが尋常な様子でないのは判る。

私が何を言っても何をしてもしも怒らなかつたガイホウ様の初めての怒りは十分に恐ろしく、私が直接怒りをぶつけられたのでもないのに

震えが治まらない。

同じように怯えているヨウゲン様を抱きしめると、私の腕の中で彼は意識を失うよう眠りについた。

「アイリさん、ガイホウ様を追いかけてください」

「え？」

「僕の失言です。彼が忘れていないのを知っていたのに。ヨウゲン君も傷を負っているのを知っているのに」

「タイガさん？」

「お願いです、アイリさん」

「でも、今から追いかけても追いつかないでしょうし・・・それに、私が向かっても」

「いえ、あなたがいいんです。彼の行く場所は判ってます。場所を教えますから、お願いです」

焦りのためかいつもより早口になったタイガさんは、必死な眼差しで私を見詰めた。

幾度も言葉を重ねられ、逃げ場を失い俯く。

私だって判っている。

今のガイホウ様がとても揺れやすい状態であろうことは。

いつだって余裕を持ち笑っているガイホウ様。

その彼のあからさまな動揺は初めてで、心から戸惑っている。

瞳は傷ついた色を宿していた。

唇は強張り引きつっていた。

私を抱いた腕は初めて加減を間違った。

呼吸は荒くその雰囲気は荒れていた。

まるで そう、まるであの日の自分みたいだった。

父親に捨てられたことを知り、受け入れられない傷に涙を堪えた。
癒せぬ傷を抱え、そのくせ傷は深いものではないと強がり奥深くに
眠らせた、あの日の私がそこに居た。

猿の世界にとりっぷ！（後）

大きな木の枝で出来た道を走り抜ける。

すれ違う猿の皆さんが挨拶してくれるのに返事をしつつ、時には伸ばされる手をかわして走る。

息が切れる。喉が渴く。心臓がどくどくと脈打ち、汗がにじみ出た。

こんなに必死に走ったのはいつ以来だろうか。

『おとうさん、おいてかないでっ』

瞼をきつく閉じ奥歯をかみ締める。

嫌な記憶がちらつき、それを振り切るためにスピードを上げた。

猿の一族は基本的に木の上で生活する。

それなのに私がタイガさんから教えてもらった場所は、木の上から遥か下の地上だった。

木から降りる道など補正されていない。冗談抜きで命がけで木から降りたおかげで、私の数少ない私服のスカートはぼろぼろだ。上がる息を整えて久しぶりの地上を歩く。

木々の間から差し込む木漏れ日が地表を照らし、原生林ゆえの手入れされていない美しさがある。

影ばかりではなく程よく差し込む光は優しい温もりを感じた。

「 ガイホウ様」

その人は、一人で大きな体を丸めるようにしてそこにいた。
小さな背中だった。

普段あれほど大きく見える人なのに、余裕を持った猿の長なのに、
いつもの覇気をまるで感じさせない背中だった。

私が後ろにいることくらい気づいてるだろうに、振り返りもせずじ
つとしている。

彼の前に何かあるのかと覗き込んだが、何一つ特別なものは見当た
らない。

木々の間に少し空けた場所があるだけで、私には何も特別なものは
見つけられなかった。

一つため息を吐き、慌てて息を吸い込む。

お母様からの教えの一つ。

ため息を吐きそうになった時は、息を吸い込んで深呼吸に変える。
ため息一つで幸せが逃げるなら、その分の幸せを取り込めるように。

私の知るガイホウ様はふてぶてしくて図々しくて厚かましくて腹立
たしい男前だ。

猿の長はもてて当然と笑う、激しく嫌味ったらしい自信満々の猿な
のだ。

「私、猿なんて嫌いでした」

「 知ってるよ。タイガを好きって言うのも口先だけだろ。お
嬢ちゃんはいつだって俺たちに対して一歩引いてる。嫌いじゃない
が好きじゃない。いつだってそうだ。観察するように見定めて俺た

ちとの距離を測っていた」

「そうです。私は猿が嫌いだったんです」

猿は嫌いだ。

調子よくて浮気性で残酷だ。

お母様は猿を見るたびに悲しそうだった。

『俺が帰ってくるまで、こいつで我慢してろよ』

そう言ったお父さんは、大きな猿のぬいぐるみをくれた。

生まれて初めてのプレゼントは、さよならの宣告だった。

綺麗で賢く優しく強いお母様が好きになったのは、猿みたいなお父さんだった。

お父さんは猿みたいな顔をして陽気でひょうきんでどこか憎めないところがあつて、親友の奥さんが未亡人になったからと自分の妻と子供を捨てて行ってしまう人だった。

帰ってくるって約束したのに、五年経っても帰ってきてくれなかった。

毎日猿のぬいぐるみを抱いて寝た。

お父さんとそっくりのぬいぐるみは私が大好きなものだったけれど、年を取るにつれて憎しみの対象になった。

動物園に行くたびに猿を見たいと強請ったけれど、お母様のお顔が曇るのを見てられなくて、いつしか『猿』そのものを避けるようになっていた。

この世界に落ちた日のことを思い出す。

あの日は久しぶりに猿を見ていた。

私とお母様を捨てたお父さんからの連絡があつて、待ち合わせた動物園。

お母様が最初に向かったのは『猿』がいるところで、やっぱり待ち続けていたお母様を私は少しだけ怨んだ。

この世界に落ちたのはその天罰だと思つたのに。

ぬるま湯に浸かっているようだ。

許したくない、好きになりたくない、心に入れたくないと拒絶するのに、彼らは私に土足で上がりこんだ。

小さくて可愛いヨウゲン様はまだ庇護を必要とする子供で、愛さずにいられない。

優しくて暖かいタイガさんの傍はとても居心地がよくて、本当は理由無しに傍に居られたらそれでよかった。

そしてガイホウ様。

女誑しで酒好きで鬱陶しいどうしようもない人だけれど、私が泣いている時や悲しみにくれた時は何も言わずに傍に居てくれた。

まるで、お父さんにもらつた猿のぬいぐるみのように。

「お嬢ちゃんは罪作りだなあ。その気もないのにタイガに侍るなんて」

「侍っていませんよ。可愛らしいと思つたのも好ましいと思つているのも本当です」

「でも猿は嫌いだろ」

「ですから、嫌いだつたと申しているのです。きちんと聞いてくだ

さい」

嫌いでいるのも馬鹿らしい。

ぐいぐいと押し込んでくるくせに、肝心なところで引くなんて情けないにもほどがある。

私はガイホウ様のことなど何も知らない。

別に知りたくないし、知ろうとも思わない。

けれどこの上なく落ち込んでいるのを見ても、放置しておこうと思うほど冷徹にはなれない。

認めがたいが、私もお母様と同類なのだ。

どうしようもなく駄目で馬鹿な男を放っておけない悪癖を持っているに違いない。

知りたくなかった真実だが、見過ごせないから仕方ない。

普段厚かましい男が見せる弱い部分に折れてしまうなんて、我ながらどうしようもない。

「絆されてしまうのは嫌だったんですけどね」

「お嬢ちゃん？」

「情けない格好しないで下さい。貴方は猿の長でしょう。いつもの余裕たつぷりで厚かましくて腹立たしくて図々しくてどうしようもない女誑しで」

「……改めて聞くと俺って凄く酷いんじゃないか？」

「でも、阿呆みたいに懷が広くて優しく強いのが自慢でしょうが」
「お嬢ちゃん……」

こちらを向いたままの背中に覆いかぶさりきゅっと首に抱きつく。
身長差が甚だしくある私たちの場合、そうしてもまるでおんぶして
もらっているようになった。

びくり、と大げさなくらいに体が揺れ、顔がこちらを振り向いた。
切れ長の瞳をまん丸にしたガイホウ様は、いつもよりずっと幼く見
えて、なんとなく可愛いと感じてしまう。

「ガイホウ様、実は口で言う以上に私に惚れてますね」
「っ」

確信を籠めて告げれば、余裕を崩さなかった彼が、初めて無防備な
までに真っ赤に顔を染め上げた。

息を詰め、短く刈られた金色の髪をくしゃくしゃにかき混ぜる。
そわそわと視線をあちらこちらに逸らし、ぐうっと喉を鳴らして肩
を落とした。

「・・・俺の」
「？」

「俺の背中を無条件で触れるのはお嬢ちゃんだけだ」

「それが？何が言いたいか判りませんけど」

「っ、だから・・・好きだっつってんだよ、チクショウ!!」

顔を真っ赤にしたまま、普段の余裕をかなぐり捨てたガイホウ様は
悔しそうに空に向かって吼えた。

余裕のない態度に私は思わず笑ってしまう。

あのふてぶてしい態度を保てないくらいに、ガイホウ様は私にベタ

惚れらしい。

背中に齧り付いたままの状態で大声で笑う私に、情けなく眉を下げた後つられた様に彼も微笑む。

眉を下げたままの笑顔は普段ほど格好いいものじゃないが、それでもとても好ましかった。

「また、笑ったな」

「え？」

「覚えてるか、お嬢ちゃん。俺に向けて笑うのは、これで二度目だ」

金色の瞳を細め嬉しげに告げるガイホウ様は、酷く満たされたような表情をしている。

母親を見つけた迷子みたいな顔で、首に回ったままの腕に手を添えた。

まるで大切な宝物のように扱われ酷く動揺してしまう。

腕を外そうにもしっかりと抱え込まれていて、動かすことすら出来なかった。

「言っておきますが」

「ん？」

「猿が嫌いじゃないからといって、ガイホウ様を好きかと問われれば『否』ですから」

「・・・本当につれねえなあ、お嬢ちゃんは」

くくくつと笑ったガイホウ様は、それでもとても嬉しそうだった。

拝啓

遠い空の下にいるであろう、お母様。

お元気ですか？幸せに過ごしていらっしゃいますか？

あの日、お父さんとの待ち合わせの日、いなくなった私をお許してください。

私はもうお父さんを怨んでいません。

お母様を悲しませたお父さんを憎んでいません。

私とお母様ではなく、別の人たちを選んだお父さんを怨んでいません。

本当は知っていました。

お父さんは浮気したんじゃないくて、亡き親友への義理から彼らの面倒を見ると決めたって。

本当は気づいていました。

お母様がそんなお父さんを今でも愛していて、ずっとずっと待っていたって。

遠い空の下にいらっしゃる私の大好きなお母様。

どうか幸せになってください。

あの日の約束の場所に来るはずのお父さんと、二人で幸せに暮らしてください。

私はお母様の教えを始めて破ります。

彼は魅力的で強くて格好良くて女侍らせて当然だと思っていて普段はだらけきっている駄目男ですが、私がいないと駄目なようです。

私は彼のことを何も知りません。彼も何も語ろうとしません。でもそれでいいんだと思います。

何も知らない私こそ、彼は必要としているのでしょう。
お母様の元に帰ろうと思っていたのですが、私は彼を捨てていきません。

『大丈夫。人生なるようになるよ』

この精神を受け継いで、私は強く生きてまいります。

大丈夫。口説き魔で複数の女と付き合うような阿呆は選ぶ気はさらさらありません。

私は彼を置いていく気はないですが、彼を選ぶかといえはそれは別問題です。

こつこつと働く優しくて一途な旦那様を必ずゲットするとお約束します。

どうか、大切なお母様との約束を破る親不孝な娘は忘れてください。
どうか、お父さんと幸せになってください。

私はお父さんに貰った宝物と同じ、お猿さんたちに囲まれて暮らしています。

私も絶対にこの地で幸せを掴むと誓います。
だからどうか、笑顔で人生を歩いてください。

遠い遠い空の下から。貴女が最大の誇りと言って下さった、
娘の愛理より

晴れ時々宝物

ガイホウは世界が嫌いだった。

暖かな光が嫌いだし、優しく吹く風も嫌いだ。そば降る雨も嫌いな
ら、木々に擦れる葉の音も嫌いだった。

けれど何より嫌いなのは　　今、生きている自分自身だった。

数ヶ月に一度、ガイホウはその場所に行った。

猿の一族として普通なら行かない地上にあるそこは、ガイホウと弟
のヨウゲンの母親が眠る場所だった。

彼女たちが眠る場所には印の一つ、花の一つもありはしない。

弟のヨウゲンはその場所すら知らされていない。

ガイホウは猿の一族の長の息子の一人で、父親に次いだ力を持っ
ていた。

猿の一族は重婚も普通であり、長であるガイホウの父親も当然ハ
レムがあった。

他の平民と違うのは、『子殺し』の権限を持つことだろう。

猿の一族の長は、強き者が求められる。

力を示してこそ頂点に立つのが相応しいとされ、ガイホウの父親も
例に漏れず強かった。

そして猿の一族の男は独占欲が強い。いい女を求めて困う本能を持
つと同時に、その女が他の男に気を持つのを許せない。

ヨウゲンの母は、不幸にも別に惚れた男がいた。

そしてヨウゲンの生まれた時期が微妙であったことから、父は長と
しての権限を執行しようとした。

つまり、父親の曖昧な息子を、殺そうとした。

長の一族ではそれは別に珍しいことではない。

実際祖父の代にも起きていたし、その前にもあった出来事だろう。

しかし猿の女は子煩悩なものが多く、その身を盾にしても子殺しを防ごうとする。

ガイホウの母親はヨウゲンの母親の姉だった。

妹の息子を殺されるのを防ごうとし、自らも妹とともに夫に殺された。

目の前で起きた惨状を、五年経った今でも明確に思い出せる。

その時父親から弟を守ろうとし、ガイホウも背中に消えぬ傷を負った。

ガイホウの行動は長の一族のものとして異例だった。

弟が生きていれればいずれ長になる壁になるかもしれない。

それ故に子殺しが起きても長の子供は見えて見ぬふりをするのが通例だった。

ガイホウだってそうするつもりだったのに、体は無意識に動いてしまった。

それから必死だった。

先代の長を殺したガイホウは、父親の後を継ぎ長を襲名した。

猿の一族は情報を管理する一族だ。

野蛮だと思われがちだが手先も器用だし頭も回る。

日がな一日回ってくる重要な項目をチェックし、長として相応しく女を幾人も囲った。

それでいて同時に父親の持っていたハーレムを解散させ、ヨウゲンだけを手元に残し他の女や兄弟たちは自由に暮らせるようにと生活の保障をして屋敷の外に出した。

感謝する女など一握りで、大半のものに怨まれた。

長の女としての権力を奪われた彼女たち。長の一族としての権利を奪われた子供たち。

幾多の恨みを買って、それでも改める気はなかった。

ガイホウ自身ハーレムを作る気もなく、これから先この悪習を壊していくつもりだったから。

気がつけばガイホウの元に損得無しに残されたのはヨウゲンだけで、努力してもどうしても何もかもが掌から落ちていくようだった。

いつだって余裕を見せるためにポーカーフェイスを手に入れた。

力を誇示するために強靱な肉体を、女を侍らせる魅力を手に入れた。それでもガイホウは常に何かに飢えていた。

何もかもに飢えながら何を求めているかも判らない。

いつも通りに数ヶ月に一度の墓参りに行っていたある日、ガイホウは思わぬ宝を手に入れた。

空から落ちてきたそれをとっさに掴んだのは条件反射に近かった。

珍しく地上にいて、珍しく墓参りにいて、そしてその偶然が重なった先で崖下へと堕ちていこうとする落人を拾った。

掴んだ腕は細くって、伝わる感触から肩が抜けたのに気づいた。

長く伸ばされた栗色の髪が風に揺れるさまに見惚れた。

自分よりも遥かに小柄な体に、愛らしく整った容姿。

肩が抜けたのなら痛みも酷いだろうに、悲鳴も上げずに歯を食いしばった彼女は、視線が絡むと僅かに目を丸くして　そして気の抜けた笑顔に向けた。

その瞬間、色あせた世界に光が戻った。

落人の少女は随分と型破りだった。

ハーレムを作る猿の一族への嫌悪も隠さず、猿族一の男前と言われるガイホウのアピールにも毛の先ほど摩かない。

綺麗で愛らしく人形のようなのに、その赤く色づいた唇から漏れるのは大体が毒舌だ。

猿の長であるガイホウにも一步も引かずに立ち向かい、真正面から小さい体でこつるさく注意する。

やれ女を馬鹿にするな。

やれさつさと仕事をしろ。

やれ酒を飲むなら飲まれるな。

やれセクハラ反対色ボケ猿。

やれ寝るときはきちんとベッドで寝ろ。

やれ風呂に入ったら頭は拭け。

馬鹿みたいに一々小言ばかりだ。

可愛い顔を膨らませ、ガイホウからしたら子供みたいに小さい体を精一杯に伸ばして、真っ直ぐに瞳を見て訴えるのだ。

それは酷く心地がよく、嬉しく暖かなものだっただ。

凄く怒っているのに、ガイホウの存在を根本から否定するのではなく、どちらかという心配されての小言が多かった。

ハーレムに加わる気はないと宣言しながら、関係を持った女よりも深く踏み込む彼女に、好奇心は恋へと代わっていた。

彼女が来てから女との無為な行動はとうに止めているのに、未だに勘違いする姿が面白くからかってしまう。

メイドたちも彼女を妹として可愛がり、屋敷の雰囲気も徐々に変わった。

特別の意味を初めて心から理解して、そうして飢えていた『何か』が何か理解した。

好きな男がいると聞いて動揺したが、本当は判っていた。

彼女は『猿』そのものを忌避している。

見ていれば判った。

あてつけがましく『好きな男』と言っているが、それは絶対に恋愛感情ではないだろう。

それでも心が急くのは口先だけでも『好きな男』なんて言われたからだ。

みつともないのは判ってる。

けれど失いたくなかったし、余裕もない。

馬鹿みたいだ、と思う。

生きてきた中でこれほどなりふり構わないでいるのは、きっと今が初めてだ。

見た目ほど余裕もなくいつだって閉じ込めてしまいたい。

猿の女として口説かれるのはいい女の証。しかしそれすら許容できないくらいに、いつの間にか嵌っていた。

他の女は要らないから、ただ一人の彼女に傍に居て欲しい。

何も知らない、何も知ろうとしない彼女にこそ惹かれた。

馬鹿みたいだけれど、猿の長としての本能を全て失った行動だけけれど、それでも一人で十分だった。

背中に触れる重みに笑う。

父親に殺されかけてから、誰にも触れさせることがない場所。

いつだって警戒し、近寄るだけで怒鳴るほど繊細な部位のはずだった。

それなのに。

今は、この背に触れる温もりの、なんと愛しいことだろう。優しく暖かくて、嬉しくて擦りたい。

彼女が自分を傷つけるはずがないと、心の奥深くで信じきってしまったのだらう。

愚かだと思いがどうしようもない。

「お嬢ちゃん」

「・・・何ですか？」

「俺はいつかお嬢ちゃんを俺の嫁さんにするからな」

「お断りですね。私はいいい男にしか靡かないんです」

「だから言ってるだろ？俺以上にいい男はいねえってな」

「私も言ってるでしょう。私の好みはタイガさんのような方です。片手間に女を侍らすような人、お呼びじゃないんですよ」

腕を掴んだまま下から覗き込んだら、つんと細い顎を突き上げて彼女は生意気に笑った。

可愛らしい容姿に似合わぬ意地の悪い表情に、ガイホウは晴れ晴れと笑った。

嘗てガイホウは世界が嫌いだった。

暖かな光が嫌いだし、優しく吹く風も嫌いだ。そば降る雨も嫌いなら、木々に擦れる葉の音も嫌いだった。

けれど何より嫌いなのは　　今、生きている自分自身だった。

それでも彼女が傍にいたら、世界はどんどんと色づいてきた。

嫌った世界は遠のいて、笑う回数も増えてきた。

嫌いだった世界は、鮮やかに幸せを運んでくれる。

暖かな光に目を細める彼女が好きだ。

優しく吹く風に髪を靡かせた彼女が好きだ。

雨の中は小さな声でハミングする彼女が好きだ。

木々に擦れる葉の音に耳を澄ます彼女が好きだ。

嫌いだった世界をもっと好きになれたなら。

母親たちが眠るこの場所に、ヨウゲンを連れて来る日も近いかもしれない。

損な人

最近タイガの元に落人と呼ばれる少女が通うようになった。

猿の男として何の魅力も持たない、いい年の男に何故か懐いた少女は、晴れやかな笑顔を隣で見せてくれる。

小さくて可愛くて愛くるしい女の子。

手が届く距離で微笑む少女に、タイガはいつしか惹かれていった。

「アイリさん、今日のおやつは何ですか？」

「今日はボックスクッキーです。美味しく焼きましたよ」

「やけたのじゃー！きょうもアイリのおかしはうまうまじゃー！」

ききつと嬉しげに笑った小猿が、愛理の腕に尻尾を巻きつけ手を鳴らす。

すっかりと懐いた様子に微笑みが自然と浮かぶ。

これほどヨウゲンが誰かに懐いたのは初めて見た。

甘えるように喉を鳴らし、擦り寄る姿は母親に甘える息子そのもの。物心ついてすぐの頃に実の父親に母親を殺された子供が笑う姿は、心温まり喜ばしいものだ。

ヨウゲンに手を伸ばすとその小さな頭を撫でる。

この小猿は兄の幼い頃にとっても似ていた。

きつともう少し年齢を重ねれば、兄によく似た格好いい猿に成長するだろう。

巨大猿に成長したヨウゲンを見たときの愛理のリアクションが今からとても楽しみだ。

何しろ、愛理が猿を苦手に行っているのはタイガとて気がついていいる。

憧れも尊敬も嘘ではないだろうが、引かれた一線に気づく程度に、タイガとて愛理を見ているのだ。

「僕のところに持ってきていいんですか？」

「え？」

「アイリさんには、ガイホウ君がいるでしょう？アイリさんの手作りならガイホウ君が欲しがると思いますが」

複雑そうな表情の少女は、曖昧な笑顔で小首を傾げた。

どうしたのかと目を瞬かせると、彼の実弟であるヨウゲンが答えをくれた。

「あにじゃなら、つまみぐいしてアイリにのされたのじゃ！いまごろいえでばたんきゅーじゃ！」

「・・・おやおや」

「あの！別に私が普段から暴行を働くとかじゃなくって、今回はたまたま！たまたま当たり所が良過ぎたんです！」

「そうなのじゃ！あたりどころがよすぎて、いっぱつであにじゃはしずんだのじゃー！」

けらけらけらとヨウゲンは笑うが、それが本当なら一大事だ。

何しろガイホウは猿の一族の中でも随一の強さを誇る長だ。

他の誰もがあこがれる猿なのに、彼を一撃でノックダウンなど広まったらただではすまない。

目を見開いて目の前の少女を見てみると、徐々に顔を赤くした愛理は両手で顔を隠して俯いてしまった。

「全く、酷いぜお嬢ちゃん。俺をぶん殴ったまま放置か？」
「ひっ!？」

突然気配もさせずに現れたガイホウに、愛理が飛び上がって驚いた。元々大きな瞳が零れそうなくらいに見開かれ、落ちてしまわないかと無駄に心配になる。

密かに焦っていると、片手で腰を掴まれた愛理はそのまま軽い仕草で片腕を椅子に座らされた。

手馴れた様子で愛理を抱き上げたガイホウは、視線の高さまで持ち上げるとにいつと意地悪く笑う。

その笑顔を見た愛理は、むっと顔を顰めると遠慮なく手を振るった。小さな手がガイホウの肩を叩き、予想より響いた音に驚く。

するとガイホウは益々笑みを深めて犬歯を剥き出しにして愛理に顔を近づけた。

吐息すら触れるんじゃないかと思える距離で、彼はゆるりと唇を開く。

「いいのかお嬢ちゃん。憧れのタイガの前でじゃじゃ馬振りを披露して」

「っ!？ち、違うんです、タイガさん!私、別にいつもこんなことをしてるわけじゃ」

「いいや、タイガ。騙されるなよ。お嬢ちゃん是这样見て案外に手が早いぞ」

「ガイホウ様!」

きりきりと眉を上げる愛理に睨まれ、それでも蕩けそうな笑顔を浮かべたガイホウは楽しそうだった。

タイガはガイホウの過去を知っている。

父親に殺されかけた兄弟。

実際に母親は失われ、守るために父を殺したガイホウ。

ガイホウはずっと一族の中で浮いていた。

ハーレムを持つ猿の一族。その長でありながら、彼はハーレムを持たない。

女を侍らせる真似事はしても、婚姻関係は一度も、誰とも結ばなかった。

特別は作らず父のハーレムを解体し兄弟たちと縁を切った。

強き猿でいながら異端。

通例を打ち壊す長に、猿たちは戸惑っていた。

孤高の長。尊敬されても理解されない。それが猿族の長であるガイホウだったのに。

「ガイホウ君とアイリさんは仲良しですね」

「そうだろう、そうだろう」

「誤解です、タイガさん！」

同時に言葉を発する彼らに、タイガは笑った。

本当は年若い少女に心惹かれていた自分を知っている。

一途な眼差しも優しい雰囲気も凜とした雰囲気も回転の速い頭も、全部全部を好んでいた。

こちらを見た瞬間の憧憬と焦燥。

例えばその瞳に恋情の欠片すら見受けられずとも、確かに恋をしかけ

ていた。

タイガは誰にも気づかれぬ内に、深く静かに蓋をする。
惹かれた想いに、芽生えた感情に、見ないフリをして蓋をする。

「・・・僕もお嫁さんが欲しいですね」

「それなら、私がっ」

「おっと、お嬢ちゃんはおれの嫁だろ」

「ちがうのじゃー！あにじゃではなくおいらのよめじゃ！」

一気に騒がしくなった室内にまだこの居心地のいい空間が続けばいいのに、とそれだけを願った。

これだから自分はこんな年でも独身なんだろうと思いつながら。

小嘶

ある日知人の家に行ったら、仕事場兼家の中がちいさきもので一杯になっていた。

しかもそれだけではない。

知人のタイガを中心に円を作り、ちいさきものとさらに客人兼将来の嫁が床に直か座りをしている。

珍しい事態だと目を丸くしたのは、しかしながらそれが原因ではなかった。

「アイリ・・・？」

元々弟には極端に甘いが、猿を苦手としているはずの愛理がちいさきものたちを体中に貼り付けて楽しげにハミングしているのだ。

その光景にこそ驚いて目を瞬かせたガイホウは、恐る恐る愛理に近寄るとそつと髪に触れようとした。

しかし気配に気づいたのか、後ろを振り返りもせずにもその手を打ち払った愛理はいつもどおり冷めた眼差しをガイホウに向ける。

てつきり苦手意識が改善されたと思い込んだガイホウは、普段と変わらぬ手厳しさにがくりと肩を落とした。

「何だ、お嬢ちゃん。どうしたってそんなに体中にチビをへばり付けてんだ？」

「タイガさんが知り合いにお子さんを預けられたんです。それで偶々遊びに来ていた私も一緒にベビーシッターをさせてもらっています」

「いやあ、アイリさんは面倒見がよくてとても助かっているんですよ。」

にこにこといひ年して邪氣のない笑みを浮かべた知人を見詰め、視線をアイリへと戻す。

ちいさきものに触れる手はあくまで優しく慈しみに溢れていた。

「お嬢ちゃん猿は苦手じゃねえのか？」

「・・・この子達の前で酷いこと言わないで下さい。元々私はお猿さんグッズを集める程に猿は好きです」

「何!？」

「そうだったんですか?」

「はい。ただし身の丈より大きい猿は苦手ですのであしからず。あ、タイガさんは別ですよ」

にこり、とタイガに向けて笑みを浮かべる。

それが面白くなって無理やり腕に抱きこんだら、愛理ではなくちいさきものから反撃を受け思わず睨みつけければ怖い顔で愛理に叱られた。

理不尽だと唇を尖らせると、いい年した男がして可愛い態度じゃないですね、と可愛い顔で辛辣に釘刺され益々気分が凹む。

「私、小さいお猿さん大好きです。目はきゅるきゅるですし尻尾はふりふりですし離れまいと体にしがみつく仕草は愛らしいですし毛並みもふさふさですし」

「毛並みなら俺だっていいぜ?」

「万年発情期は最悪です」

つん、と形良い顎を逸らすと、そのまま近くの猿に頬を摺り寄せた。キイキイと嬉しげに鳴く姿から愛理に余程懐いたのだろつと察せるが面白くない。

それは腕にしがみ付いている弟も同じらしく、ぷくりと頬を膨らませると腕をにじり上り頬を摺り寄せる小猿の顔をどかした。

「アイリはおいらのじゃ！はなれる！」

「まあ！焼き餅を妬いていらつしやるんですか、ヨウゲン様？大丈夫。私はしっかりヨウゲン様を愛してますよ」

「っ・・・あいしてる？あいしてるってなんじゃ？」

「可愛くて特別で大好きという意味です」

「・・・それならおいらもアイリをあいしてるのじゃ！アイリはおいらのよめになるのじゃ！」

「まあまあ、なんて可愛らしいんでしょう！」

ヨウゲンに顔を摺り寄せる愛理を見て、ガイホウは鼻を鳴らした。

彼は知らない。

このときの言葉どおり、数年後ヨウゲンが愛理を娶ろうとすることなど。

そしてその後にかかる兄弟喧嘩の勃発は始まりでしかないことを、彼は予想すらしていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9336o/>

猿の世界にとりっぷ！

2010年11月23日01時15分発行